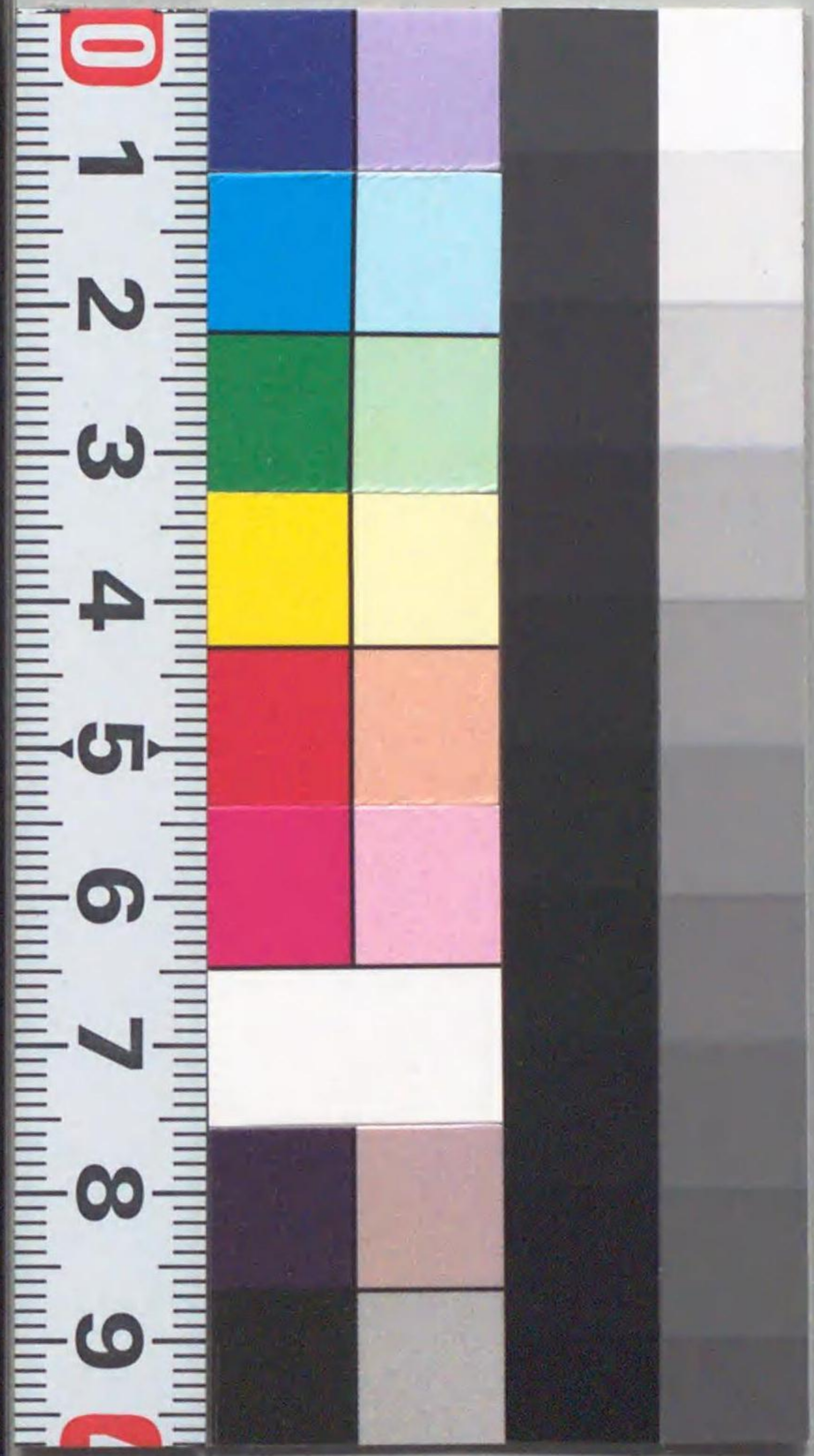


911.168  
M4442m  
W

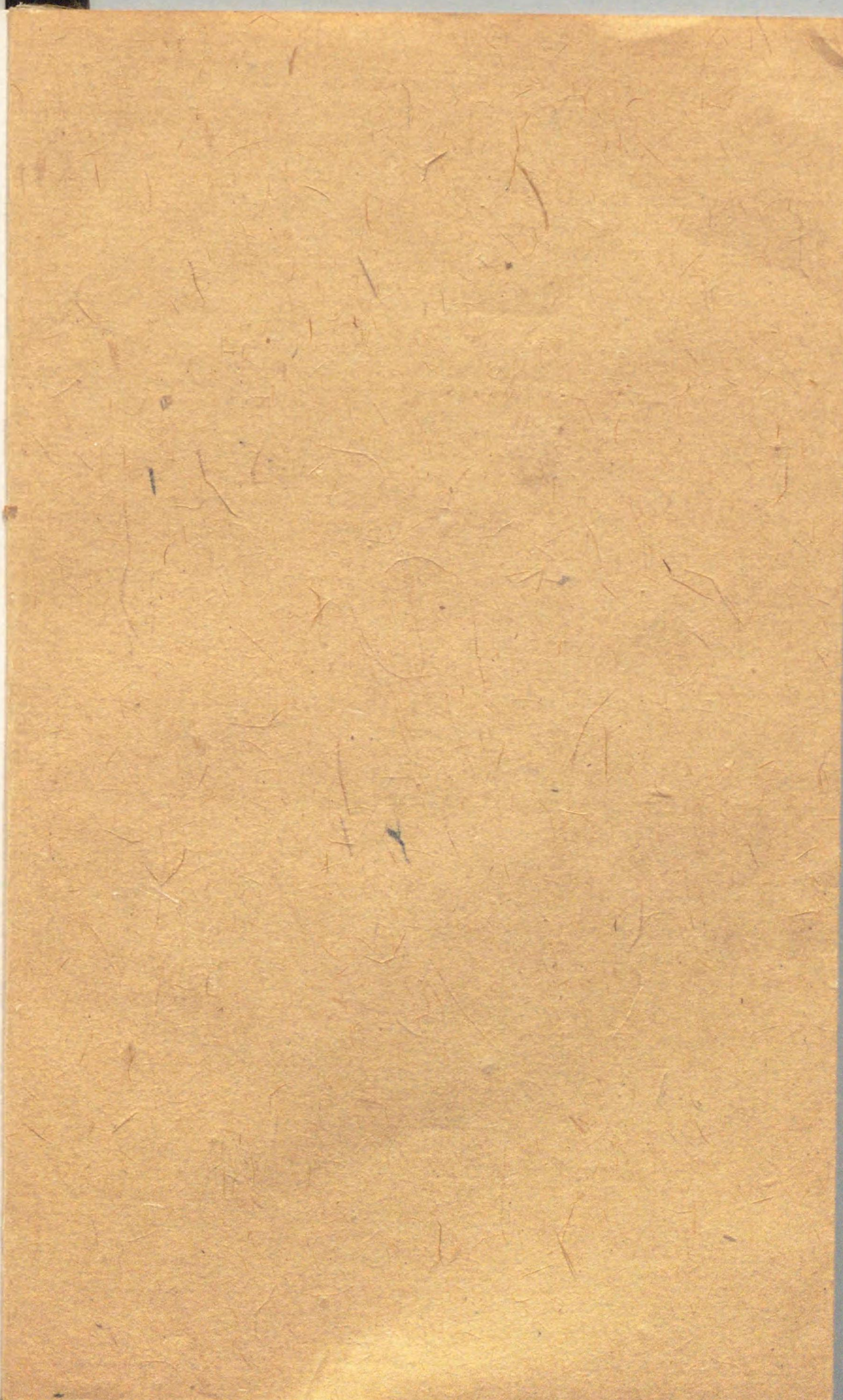


尚島先生集



下

52002



831.119  
M. 111111



問島弟系集



下

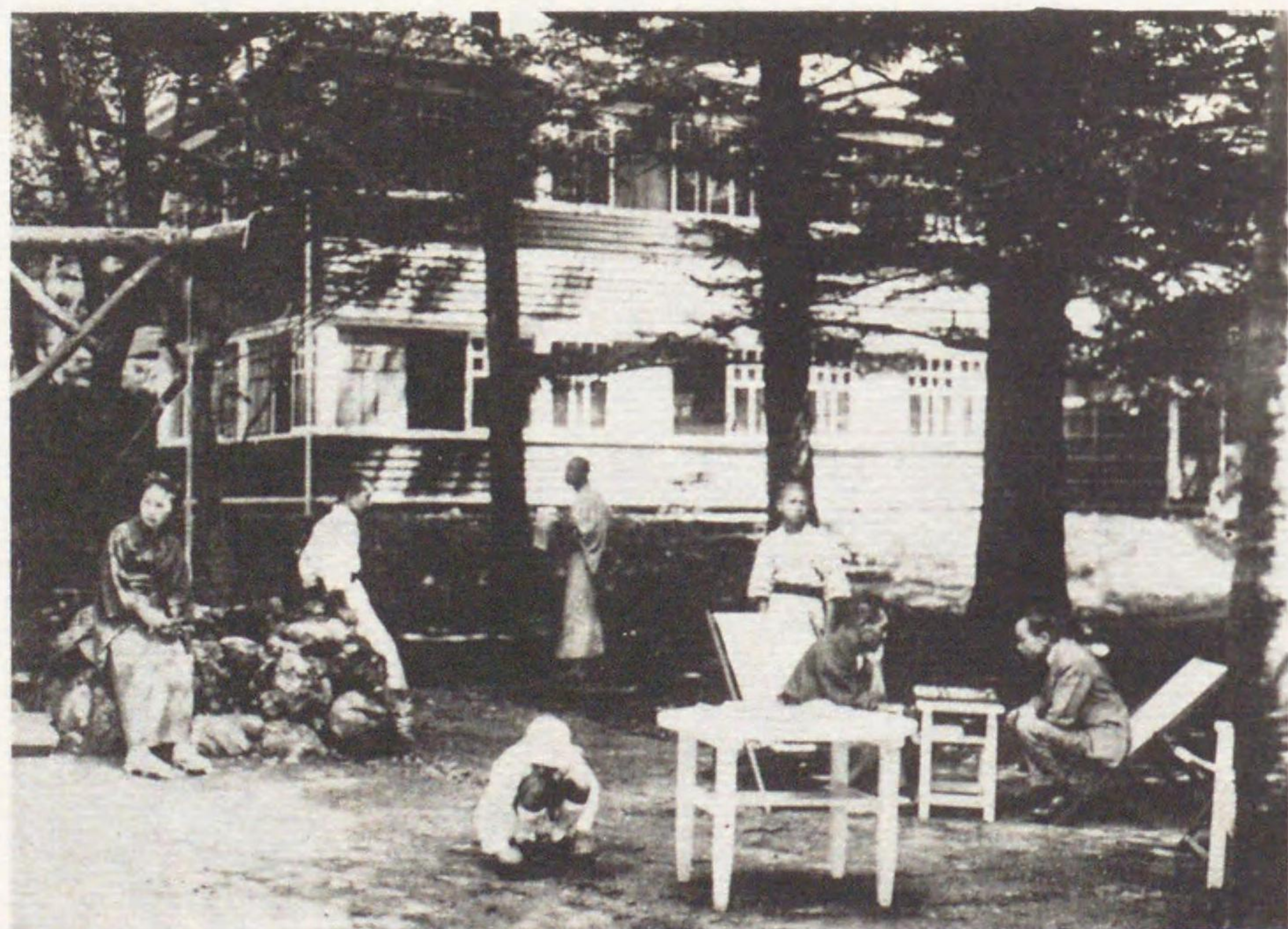


003285

Handwritten mark or signature.

911.168  
M4442m

五三書齋



臥雲山房之圖



住友務氏寄贈書

693582



縄うきく

あはれ

お多光

お多光

お多光



間島弟彦集 下

由比が濱

久にしてわがふむ砂の松の徑はこみちだら日ゆらぐ  
竹のほさきに刻る

庭木戸につづく砂みち松のこみち海まづ光る  
砂丘の上に

あこがれし海遠廣くかがよへり狭きに馴れし  
まなこ眩まよしも

いきづきてのぼる砂丘まなかひに春の大らみ  
照りひろぞれり

降りそそぐ光まぶたに心地よし手をおく砂に  
こもるぬくみも

とどとどと間遠に響く波のちと春の心の長閑  
けさにをり

波うちぎはまぶきが中を掠めとぶ鴉のはねの  
ぬれ光るかも

うねりうねりくだくる波を飛びしさりかうべ  
かしげて瞰め入る鴉

潮さゝるをそがひにかへる眞砂みち生垣がくり  
鳴くみそさざい

○

鍬の柄にこま鳥なきぬ尾をふりぬ青みそめた  
る芝生のあなた

○

度ましく涙ぐましくいたましく物思ひふかし  
病みこやりゐて

現身<sup>うつし</sup>を悲しむ心極まりてはろけき命に觸るる  
夜半なり

いささかのゆとりもたればまがなしき運命<sup>さだめ</sup>の  
我をさかり吾<sup>あ</sup>が見る

ふとさめて眞夜のしじまの闇の底にもものいひ  
て見つ我が聲きくべく



ものいへばのどの奥處ゆかすれ出づるこゑの  
小ささわがとしもなく

日もすがらものいはずあれば濁り江の水沸く  
ごとし心重たみ

手あつれば胸冷えぬれて眞夜中のねざめごこ  
ろの重くつめたき

手の瘡のしるくも見ゆれふくだめる脈のあは  
ひのうたて黄いろく

自省

夢うつつよれつほぐれつ風の日の空と雲との  
たたずまひかも

世と我のかかはりにいきて我にいきぬうつろ  
心のしみじみさびし

大き澤の岸の芦間のこもり水ゆるきながれに  
あぎとふ小魚

物觸れて素やきの破片かの幾ひらとならむ日ま  
での此の破甕やれもたひ

かへりみる人なき棚の破甕ただに黙もたしてあり  
經む月日

繩かけて隅にそと置きやれもたひうてば響き  
し時もありしか

見らく眼のちから足らはす擱つむらく手力た乏し  
海月男か

雀

終日を縁に仰臥し雨樋あまに來遊ぶ雀なつかしみ  
けり

小さくまろき頭突き出しわれ見下ろす黒き瞳  
かなし屋根の雀の

雨樋ゆ蕈垂れ下りゆらりゆらりゆらるるなべ  
にちちとなく雀

ふくだめる子すずめつれて親雀ならぶ小枝の  
動き久しも

雑草

蹲まり草ひくわが手汗にまみれくろぐろと光  
る午後の日をつよみ

芝生

ペルシヤの氈ふむにもまして軟かうしづむ足  
裏のふれのよろしも

あてびとの玉のあなうらうづむべく緑清しも  
芝生の氈は

睡蓮の池

睡蓮のまろ葉かさなりつぶつぶとくるき蕾の  
ぬれ光るかも

霧雨のつゆをおもたみ睡蓮のくろきつぼみは  
水にひたれり

風のむた噴水落ちてきらきらとみづの波紋の  
もつるる池の面

蛙

夕餉はてて欄に居凭れば白き雨斜に光り蛙な  
きいづ

一大事來ぬとばかりに高啼きて蛙なきやむ眞  
夜のしづけさ

孤獨の淋しさこもる汝がしらべ聞きつつをれ  
ば吾もかなしき

ひたに迫るけはしきふしのややにゆるび三聲  
長ひき啼きやむ蛙

やや間遠に三聲つづけてなきやみぬひえびえ  
としてなやみ深しも

活けるものに對ふ心のなつかしさを親しさおぼ  
え聞き入る蛙

十一年の春の頃の歌

親子三人みたりのやから二人やみ妹すこやか  
にあるがうれしき

泉水に浮ぶ木の葉を熊手もてすくひつこれも  
ありのすさびに

夏の歌

池の面にもりあがる葉の緑葉のかげを幽けみ  
咲ける睡蓮

30と曆の眞赤き字がもえて壁のほてりに息  
づまるおぼゆ

百日紅

耕房なす花めぐしもよ百日紅眞日のい照りに  
息づける見ゆ

ふりそこね雲はうごかずじりじりと灼りつく  
午後のさるすべりの花

潮騒さみは軒にせまりてこの夜らの浅き眠を脅か  
すかも

雲の層いゆき重なるしまらくを陽はかぎるへ  
りわがたつ濱邊

子の病

壬戌九月初、稻田博士、道彦を診察の結果、鹽田博士を聘す。博士は、かつて學界に報告せられたる十二支腸の閉塞と斷定せられ、十三日佐藤學士を助手として腹部切開、越えて十五日、佐藤三吉博士の立合にて、第二回の手術を施さる。其後四五日間何等の効果を現はさず、幾度か絶望せしかど、二十一日に至り、完全に下部へ疏通つき、始めて愁眉をひらく。六年羸弱瀕死の軀を以て、三週間の絶食を爲し、二回の大手術を受け、九死の中に一生を獲たる事、實に奇蹟ともいふべく、神明の加護醫療看護の最善、病者の平靜なる心境、親戚故舊の深厚なる同情、相集まりてこゝに至れるものといふべし。

きらきらと敷布に落つる秋の陽を吹き和らげて  
風心地よし

眼をふたぎ吾が手を上にそとおきぬ熱にうる  
める骨立てる手を

雙手にかかへてはこぶ素裸の瘦せさらばへる  
我子のむくろ

うつなきむくろかき抱き手術臺に運ぶ我腕  
しなえ震ふも

微風にも耐へじと思ひし衰残のむくろいえ得  
たり二度の手術に

鍛へられし精神こころひるまぜおとろへのつもるむ  
くろに尙し宿れり

従容と亡からむ後を語る聲に力漲れりたえだ  
えなれど

枕邊の父母のおもわじつと見るまなこ疲れて  
やがてとざせり

やみの中に闇黒やみのもつるるけはひしつやがて  
かそけき光ほのみゆ

白水堂

厳くしき試煉に堪へて軀みも魂たまも甦にひる日の新し  
き命



ひたふるにおそれ惶みつつしみてたたへまつ  
らく奇しき神業

白水莊にて

練絹の黄光あたたかう穂薄はかすかに揺れぬ  
ありなし風に

木立しげみ橋はかくれて橋のかげさやにうか  
べり滑川の水

山羊の子に紙食ます子の赤き頬と柿の實にて  
る夕日の光

米山氏より三島芋を送らる

富士の雪とけて培ふ三島野の畑のよき芋うま  
し白芋

藤瀬邸茶事

長路次の行燈の火影ほのにじみせせらぎ咽ぶ  
夜のしじまに

遠くちかき銅鑼のねいろはぬばたまの夜の木  
立にこもらひ流る

大正十二年二月

睡蓮の莖のゆらぎに雲のかげいささかひかり  
たそがるる池

烟突に東風の荒びの乾らびおと終日さきて爐  
のもとにをり

たたきても響たらずうつろなる鈍き心を抱  
きわが臥す

大正十二年三月白水莊にて

楓嫩芽けぶらへり見ゆくろぐろと杉のなぞへ  
のきはまる處

縁に臥せば黄昏深みひえびえとがらす戸に見  
る星のきらめき

見つむれば見つむるままに細り行きみにくき  
骸からがひとつのこれる

日比翁助君罹病、幽居十餘年、豆州長岡に旅せりと聞きて

よろこびて野ゆき山行け天地にあふれ漲ぎる  
このうらら日を

秋の庭

舞ひ下るいきほひうけし睡蓮の葉のゆらめき  
に羽ばたく鶴鴿

黄の腹を芝生に引きて鶴鴿の光り横ぎるうす  
明りの庭

陽をともしみ花咲ききらずうつむきてかげを  
うかべぬ睡蓮の一つ

大正十二年七月輕井澤に向ふ

青すすき葉ごとに陽光ひか弾はじきをる武藏大野の眼  
路のはるけさ

畑中の電柱の上に工夫をりそのすが笠の眞日  
の照はも

輕井澤鹿島森にて

苔ふかき切株のうへに首かしげ我を見つめて  
たてる駒鳥

いしたたきその尾のふれし齒朶の葉のゆらぎ  
見て居り夕餉まつ間を

縁近く群れて來遊ぶいしたたき脚ふかぶかと  
苔にしづめり

縦の老樹すくすくたてりいただきにかけてか  
ぎれる嶺ろの一線(離山)

つかれたる身を運び來て高原の杜にかそけき  
鳥が音をさく

日照<sup>そ</sup>雨<sup>は</sup>ふる森のあかるさ一面の草生のつゆの  
きらめき光る

落<sup>か</sup>葉<sup>ら</sup>松の葉かげともしみ白<sup>ゆ</sup>雨<sup>だ</sup>に羽<sup>は</sup>ぶるひ鳴き  
て枝わたる鳥

一羽まづ雲に翔りてむくの群の森をとよもす  
羽音のひびき

落葉道はてなく遠しわがかげの長きをふみて  
獨しゆくも

縦のうれの高きにこもる鳥のむれ音に鳴かず  
ただに動くけはひす

わが肌<sup>は</sup>に班<sup>は</sup>ら日<sup>ひ</sup>ふるるなつかしさ杜<sup>か</sup>の奥<sup>おく</sup>處<sup>ところ</sup>の  
風<sup>かぜ</sup>しめらへり

この杜のさびしさにひたり我<sup>わが</sup>ころなごめば  
きこゆ晝の虫の音

行けば行きとまればとまり鶴鴿と我との浸る  
杜の寂しさ

ゆびざして我に示ししその夜の星けざやかに  
照る汝<sup>なれ</sup>が魂かも(憶亡兒)

夕日かげ並木路ゆけばわが肩によりにし汝<sup>なれ</sup>が  
體<sup>み</sup>温<sup>み</sup>おぼゆも

森の夜の闇の静けさ樹<sup>この</sup>間<sup>ま</sup>透きてにほふ隣<sup>ごな</sup>家の  
灯<sup>ひ</sup>をなつかしむ

軽々と身にはおぼゆれ持<sup>も</sup>たるもの皆うしなへ  
る貧しさに居り

驟雨

飄々と曠野なびかし淺間おろし森の巨樹に來りせまるも

森の巨樹見る見るくらく縁板にたばしる雨脚のうちの烈しさ

雨のあしややにゆるびて樹に草に夕陽の光は華やかにちる

碓氷峠

石のせて屋根十あまりかたまれる上を流らふ峠の狭霧

乳茸

濃緑の苔の中よりにほやかにあからみ笑める  
小さき乳茸

○

澄み空のすみの極みに明きくらき遠山ひだのけざやかなりや

東京大震災の報を聞きて

やすらかにあるがわびしも修羅の巷生死の海  
のうめきをおもふに

かひありやなしやと聲は我にとふあるがま  
にもありふる命

大正十三年三月白水莊にて

よたよたと草生滑りて清き瀬に家鴨うかべば  
やがて一羽も

陽のぬくみしみ入る榎の大き幹に手をふりつ  
つも家鴨見て居り

川そひの岨道せばしこもらへる日かげ薄れて  
水照寂しも

みとりすと眞夜を布團にくるまれる妻の横顔  
の老いにけるかも



軒近き眞竹のゆれの薄れかけ玻璃戸にうつる  
風たつらしも

地震ゆりて犬吠えいでぬ峽の夜を犬のほえや  
まらずそこにもここにも

焚火

ほがらかに空はあがれど峽はいまだ霜ふかぶ  
かと日光さしこず

霜しろき落葉かきあつめ焚火すと燐寸をすれ  
ど燃えつかずけり

一條の煙のぼれば焚火よとおらぶこゑすも竹  
やぶの遠に

凍土に下駄の齒ひびかしかけて來るどの子も  
どの子もふところ手せり

風向が急にかはれば逃げなづみけぶりにむせ  
びをさなきは泣く

火にかざす小さき手幾つ凍傷の痕のあからみ  
いちじろきかも

枯杉葉炎々ともえほどちかき立木の枝にせま  
らんとする

煙よけてあちこちめぐりかじかみし諸手かざ  
すも焰の上に

もえさかるほのほに向ふ子らの腫の耀く見つ  
つ我もたのしき

竹やぶをぬけて向うの杉むらにまつはりうす  
れ消えゆく煙

赤埴（あかじ）の崖（たけ）にてる陽の照をつよみ前の杉むら片  
あかりすも

とまりたる小枝（こえだ）のゆれを池の面のかげに見て  
ゐる小雀（こすずめ）なりけり

友鳥はみなとび去りつ頬白ののこる一つが水  
浴びをるも

雑談のはたととだえぬかなりやの高囀りのす  
みとほる音（ね）に

枳殻（かき）のうれ陽にけぶらへり下の枝の鶇（あざ）のすが  
たのあらはなるかも

青木の實つばらに赤き岨道（しづみち）に樹ごもりて鳴く  
禽（あひだり）の群かも

水嵩ます溪のひびきは雨の音のほかに高まり  
夜はくだちたり

あらはにも鶯こづたふ眼のまへの槭かへてのあかき  
新芽はみつつ

李花

峽の木立暮れ静もりぬさきつづく李の花に映は  
えのこる光

杉村の暗緑みどりにはえて遠ひかる白き花瓣の散り  
のこまかさ

五月作

筍の根方の皮のはちきれて滑ら竹肌まさをに  
ひかれり

六月作

おほひかぶさる岸のたかやぶの奥暗み椿の花  
の真赤なかたまり

六月九日道彦の一周年に、遺骨の一部を白水莊十三塔の下に埋む

あわただしき一年は經ぬれともすれば傷つき  
やすき心のゆるび

石磴をふむわが足音後につづく孀が足音のさ  
やにきこゆれ

これやこの命の終こけ蒸せる十三塔にねむる  
子の魂たま

木下利玄君に剪花を贈りしに、歌を寄せらる。曰く「鮮らしきばらの  
剪花朝園の缺の音をきく心地する」

あさ園を缺ならしてわがあゆむばらの香にし  
む心いだきて

朝園は花の香深しやめる身のやめる友おもひ  
かたむく心

月見草

夢ひらけ花瓣ほぐれて花となるそのたまゆら  
の幽かなる音

木下行けば俄に音あり朴の葉の葉摺り枝すり  
地に落ち来る

啼きすてて森にかくれしひよの聲ただよひの  
こるゆふべの空に

人さはにをれどさびしゑ婦あらで我家さびし  
と言にはいはね

若き日の矜うすれてともすればかへりみられ  
ぬ心のうつろ

大正十四年夏輕井澤臥雲山房にて

刈草を陽のやくにほひす石の上に鎌はおかれ  
て人の見えなく

蹠裏にかろき弾力あり樹下道樅の朽葉のしめ  
りふくみて

このあさけ森にこもらへる光ありいたや楓は  
ほのあからみつ

窓によれば狭霧なづさふゆらゆらに狭霧が中  
を落葉まひ來も

大五十四年夏 兼光 兼光 兼光 兼光

○  
蒼穹に翳しいづる枝、枝の上に斧ふる漢子おほ  
にゆれつつ

高き枝に身をよせにつつ斧ふるふをのこゆれ  
をり空の眞澄に

自<sup>し</sup>が重みに枝は撓むも高き枝の撓むがままに  
斧ふるをのこ

霧の中に鴉をらびぬ一羽ならむ羽音かそけく  
谷に落ちゆく

わがしはぶき遙けき谷にこだますも霧の深海  
ひそかなるかも

浅間嶺の煙たなびき八千くさの大野に曳ける  
黒く長きかけ

浅間平かこむ山脈遠低し空のまほらの澄みの  
はるけさ



中きくし月小初あけしや  
柿の空のほろのいよくや  
あま



すくすくと縦の老樹の群立のかげをひそけみ  
あふるる清水

つづけざまに鯉はねあがり池のもの水照らす  
れて夕さりにけり

味爽の森の深處のひそかなり面にふるる縦の  
やにの香

あかときの寢覺を寒みさ夜床にすそかき合せ  
ねがへりにけり

河合省齋翁の鎌倉吟行に題す。震災後初春鎌倉作

崩崖能上乃倒連樹爾万慈留梅濃花華乏志良仁  
此春乎咲久

大正十五年秋輕井澤臥雲山房にて

百尺の縦の群立しづかなり梢にふれて星また  
たけり

群立の縦の大木のひそやかにまたまにし  
て鳥の羽ばたき

岩窪の苔の清水に鶴鴿の羽ばたき浴む幽けき  
そのおと

禽の巢

小さき頭三つ四つ動く高き枝の巢ごもり雛は  
親求むらし

えだ渡りしづかに巢による親禽の頭かたむけ  
窺ふまなざし

雛の群嘴をひろげて親禽を迎ふる見ゆれ聲は  
きこえず

餌をはこび今や巢を立つ親どりの更に隈なく  
覘くけはひす木の

黄なる嘴大きくあけて雛の群燥ぐとすれど啼  
く術は知らに

羽搏けど立つすべをなみ巢のへりに頭もたげ  
て餌を待つひな鳥

荒川光子嬢を悼む

大樹の根の苔生を踏みし白き靴まさ目に見え  
てかなしき光子

とき色の薄絹の裳の影蘸し池のみぎはに立ち  
し光子は

臥雲山房を出でたつとて

來む年も二たび觸れむ門の戸か心にいひて病  
める身おもふ

門を出づと噴井ふきの水のうまし水兩掌もろてにうけて  
飲み足らひたれ

白水莊にかへりて

樹々のすがた千草の色のしたしもよ笑あそかたま  
けて我に向へり

共に棲みし三十年まりを吾爲にまた全くささげし  
我が孀あはれ

病める身はくるしと思はずみとりする妹が心  
のさびしさおもふ

あちらぎに陽かげかそけし逝きし者ゆきて三  
年を我老いにけり

遠天とぞらの光よこぎる鳥のかげ我ゐる峽はすでに  
闇なり

我にのみ昏くらるる日ならず然れども寒く重たき  
今日のたそがれ

あまりにもかひなき命かきいだくこれの軀みくらは  
いゆもいえずも

垂りを低みこの竹やぶの茂り葉の間なくしゆ  
る揺ゆれの重たさ

誨をふべき我にはあらね今日もまた人にをしへ  
て心さびしき

雑草の朽葉しをるる断崖によどむ日光は春な  
らむとす

ラヂオにて大葬儀を遙拜す

牀の上に畏こみ伏して御轎車の哀しきさしり  
をろがみにけり

李花

咲き定まり散らむともせぬ山かげの李の花に  
たゆたふ夕日

夕日かげまともにうけて咲きををる李の花は  
静もれりけり

○

長き冬を軒に眠りてかたつむり動くともせず  
春さりにけり

昭和二年五月

尾根の鴉朗らに鳴きてひそまれる峽の八十隈  
研せりけり

洋本の紙の香あましうつとりとばらの若葉の  
陰に臥し居り

いぶせみて目をとぢ居ればそと入りつ出で行  
くけはひ嬌にかあるらし

髓にかもひそむ疲か物みると臉あぐればまぶ  
た重たき

床にたてば膝節よわし長病やみの身のおとろへを  
驚きにけり

昇かきて行くわが家やの者に禮みやのべてつつましく  
我をかへりみにけり

慣れて乗る椅子心地よし昇かく人に禮みやいふ事を  
今日は忘れつ

つながれておもひかくべき事をなみ茜雲浮く  
空を見て居り

○  
緑より緑にわたす瑠璃いろの空のまほらを仰  
ぎ臥す我は

真白鳩山のみどりを翔る見ゆ尾根うちこえて  
空に小さく

萌黄葉の柿の若葉のそがひにしこもり黒ずむ  
楓つぎの青葉は

光も有つ雲の下びを飛ぶ禽の影見失はず山の端  
を遠み

病む者は病みてをあらむすこやけき孀が旦暮  
つつみなくこそ



ものいはむ親しさもちてあした見やる我に迫  
り來樹々の緑は

一莖の草のなびきもこころひく親しさに居り  
谷戸の庵住

樹の下臥仰ぐ青葉にこがらめの小さき眼光る  
そこにもここにも

避け得ざる戦ならば戦はな強く正しくますら  
をさびて(人に、二首)

戦を避けてさけ得む此世かは正しく生きて強  
く戦へ

ひなげしのゆるるおもしろいつ迄もゆるる見  
てをり手調子とりて

葉ごもりに動く影あり餌をもらふ時をたがへ  
ずつどひく雀

地に下りし雀三つ四つこちら向く顔の柔毛を  
風に吹かせて

樹下蔭ひそまり咲ける石楠花のうすくれなる  
の放つ明るさ

夕かげり李のはないいよよ白しこの花のもつ  
浄きさぶしみ

澄みさゆる李の花の純白花みつつをあれば心  
さびしも

蹲踞に一葉散り置く柿もみぢてり映えにつつ  
たそがるる庭

紀州橋本より陀羅尼寺を白水莊に移す

大棟木梁木あらはに陀羅尼寺の御堂の屋形木  
がくれにそびゆ

陀羅尼寺の屋根のなだりの反そりを打ち山の杉村  
劃りたらずや

芽ぶき遅き槐樹の幹のうねりしるし山の傾斜なせへ  
の緑の中に

樹の下の椅子に安臥し吾が對ふ山のみどりの  
遠く廣しも

黝き幹あらはに見せて檜林もえぎ嫩葉の淡き  
烟らひ

風薫る李若葉の樹下かけ静かにふして心長閑  
けし

甦へる大天地の五月ばれ現身うらしみ吾われは病むも病ま  
ずも

米山駿二氏の一周忌に

いにし子のあとのうつろはうつろにてかへり  
來し日の今日さみだるる

○

おのれ一人直しと思もひてふるまひし稚もき我よ  
我は老いたり

陀羅尼寺の工ら去りて一時は峽の青葉の一葉  
動かず

高く低く青葉に浮ぶ陀羅尼寺の御堂の屋根の  
反のしづけさ

摘みし李布して拭けば艶々に光そひ來くも紅玉  
のごと

昇かかれ来てこれの御堂に御佛の慈顔をろがむ  
病人やまうぢ我わは亦また下くだり共ともに聖みよく光あかりをみ奉たもつ

御佛は結跏趺坐しませ眞まことうしろに白壁ほのに  
淡し御影おんかげ青葉あおはの香かほの御堂みどうの靈たまの

地に墜つる李なしの音ねにうたたねのさめて又よむ  
同じ處ところを工たくみとまじり初はじめ初はじめ青葉あおはの一葉いちえつ

やめる身のかくれ居どころ死なばわが骨を埋  
めむ峽せきの杉村すぎむら

いささかのこの自由さへ殺がるべき時をし思  
へば尊たうとし今日けふの日ひ

谷戸やの盆地へんち杉すぎの樹きかげを美しく淨きよらに保たもち寂  
しく住すまむ

豊満の命にあきし萬木の緑くろずみ秋さり  
にけり

荒木づくり水に臨める小亭の簷をつらぬき杉  
の幹立つ

御佛の前に安居し合掌す下凡の心まどひふか  
しも

たまきはる命のかぎり在りへなむ峽の杉むら  
我によろしき

天の恵あがめ悦べかよわき身迫る病苦に耐へ  
ざらむとす

我よりも苦しき人は多くあらむ耐へがたしと  
ふは男兒をのこにあらじ

生くべきおひめを負ひて我は生く長き病苦も  
忍ばねばならず

手をとりにてわれ慰むるふるき友よあふるる涙  
我にとがむな

年を経て病みさらばへる現うつしみ身に慈悲圓滿の心  
みたしめ

何か食べて見たしと思ふかそかなる心うれし  
み夕餉に向ふ

杜を透く強き日射ひざしに白菊のむらがりはゆる夕  
かげの庭

今一步いま一步我を高く淨くなさましと願ふ  
病苦の中に

静かに我をかへりみて今日はあらむ雲低く垂  
れて病ひまあり

片山廣子夫人より歌三首をよせらる。返し

病苦とあらがひにつつ寂かなる心求むと夕日  
にむかふ

眞清水の噴く音閑けき山の家の戸を守りてあ  
らむ小<sup>ち</sup>ささき赤腹

しみじみともろさを思ふ現身に微けき命たへ  
がてぬかも

○  
落葉たく烟のほひながれよる窓の日かげも  
したしまれつつ

夜も晝もふし居の床にやうやくに瘠膝まげて  
かいなでにけり



今のわれをこの苦しびゆ救はしめ生死の道は  
とにもかくにも

天のめぐみ人のなさは病み臥こるわが現う身を  
ひたしめぐるも

何事も唯ありがたしたふとしとへりくだる心  
のどけかりけり

月日はいつか流れて、去年弟彦がみまかりました日も近づいてまゐりました。

その日を思ひ、また故人を永く偲びたいと思ひますので、病んで七年、永いたづきの間にもあけくれ心をやり、なぐさめとしました歌の詠草を、佐佐木先生にお選びいただいて、遺稿に編みましたものを、生前お知らせいただいてゐた方々に、さしあぐる事にいたしました。若い時から好きな道とて、折にふれて詠み出ましたものが、貳千首以上もありましたが、ここに其うちの五百首を、おほよそ年代順に載せて、あとは又の折にとのこしました。

去年の秋、萩の花の散り亂れる風のあした、虫の音の細りゆく

雨の夜などに、遺稿の歌を寫しうつしえつつ、心にうかびました言の葉は、

秋の夜のなみだぐましさ亡き人の歌うつす手のはこびにぶしも

わすれむと思ふ吾子をも思ひ出でつこのこしし君が歌よみをれば

この集の上巻の初めにのせました肖像は、白瀧幾之助氏の筆。次なる白水莊の圖は、藤原草丘先生の筆。色紙の歌と、短冊の夕かげりは、鎌倉の作。陽を負へるは、輕井澤の作。山水の圖も、同じく彼處での筆で、畫の號は圭魚といひました。下巻のはじめ

のは、臥雲山房の縦の老樹の蔭で、藤原先生と將基をさしてをる  
寫眞。次なる二葉は、自畫讃であります。次書の「山本の國」  
なほこの集をまとめますに就いて、米山梅吉氏、その他の方々  
に、一方ならぬ御骨折をいただきましたことを、深く御禮申上げ  
ます。

昭和四年二月 間 島 愛

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the name 島 愛 and the date 昭和四年二月）

色紙の歌 もえいづる山のなだりの新みどりまむかひたてる我のか  
そけさ

短冊の歌 夕かげりは下巻七一頁に

同 陽を負へる夕晴淺間山はだにふとき紫紺のひだをたため  
り

畫讃の歌 繩かけては下巻九頁に

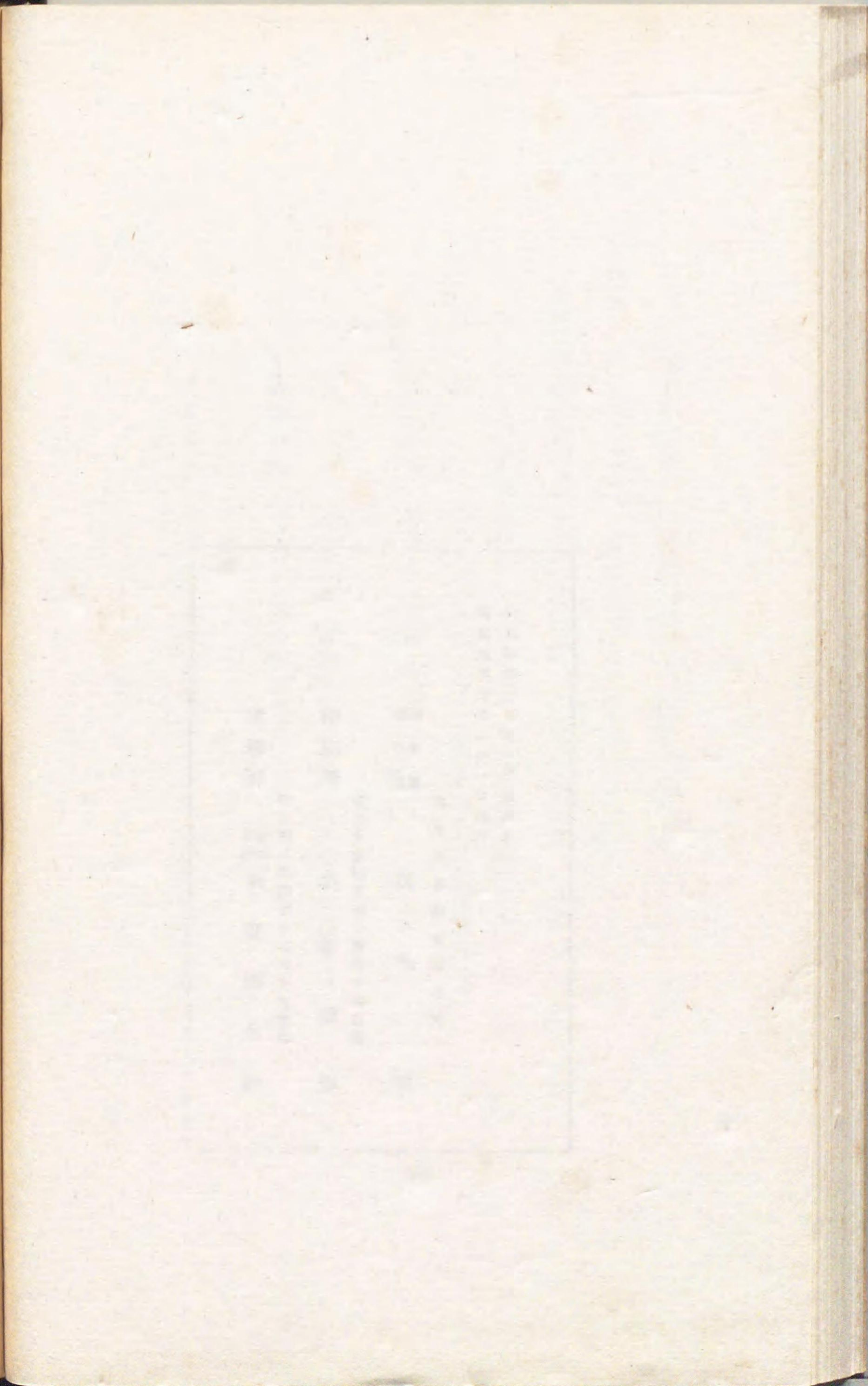
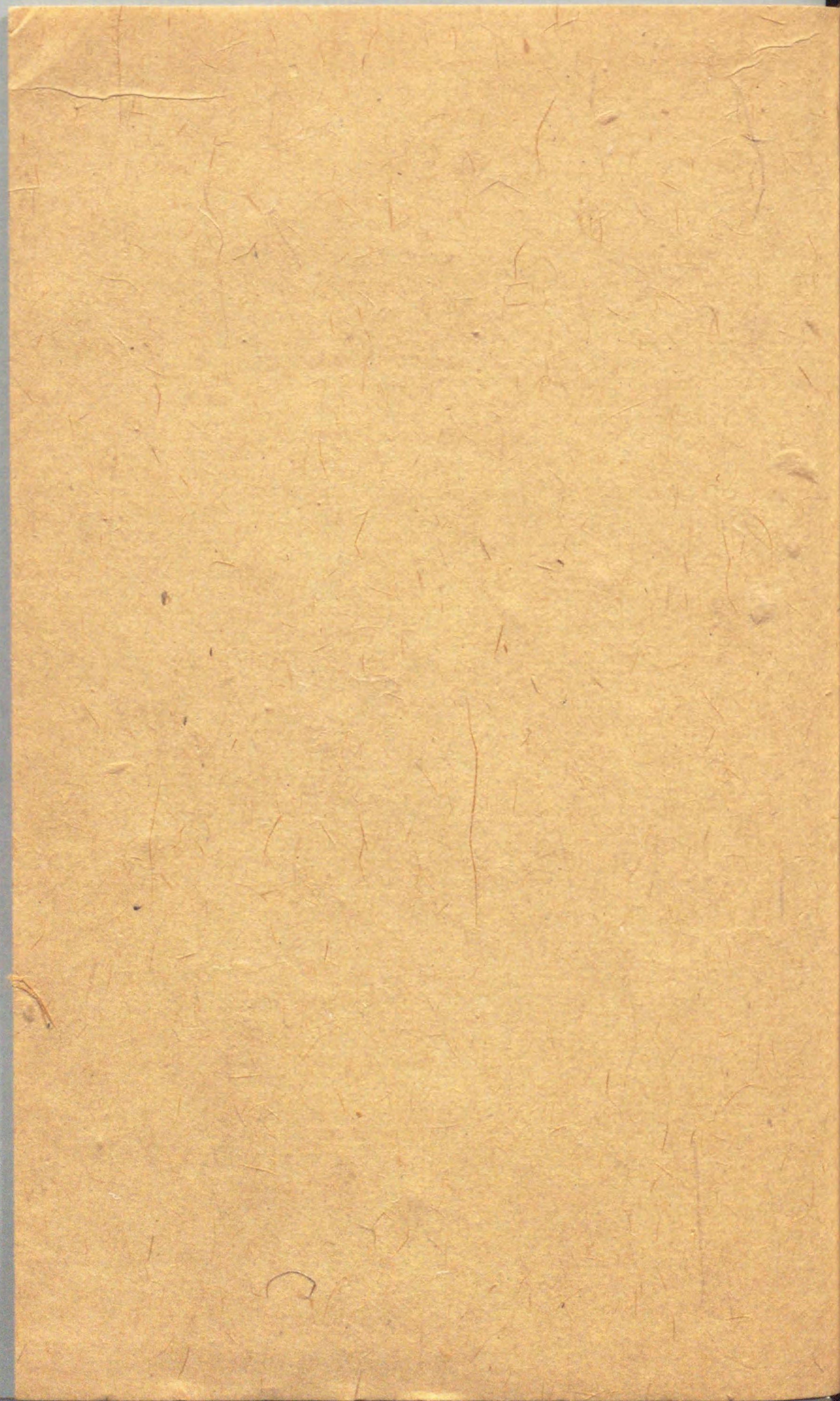
同 鳴きかはし目白とびさりし垂り枝の柿の實の赤のいよい  
よ赤き

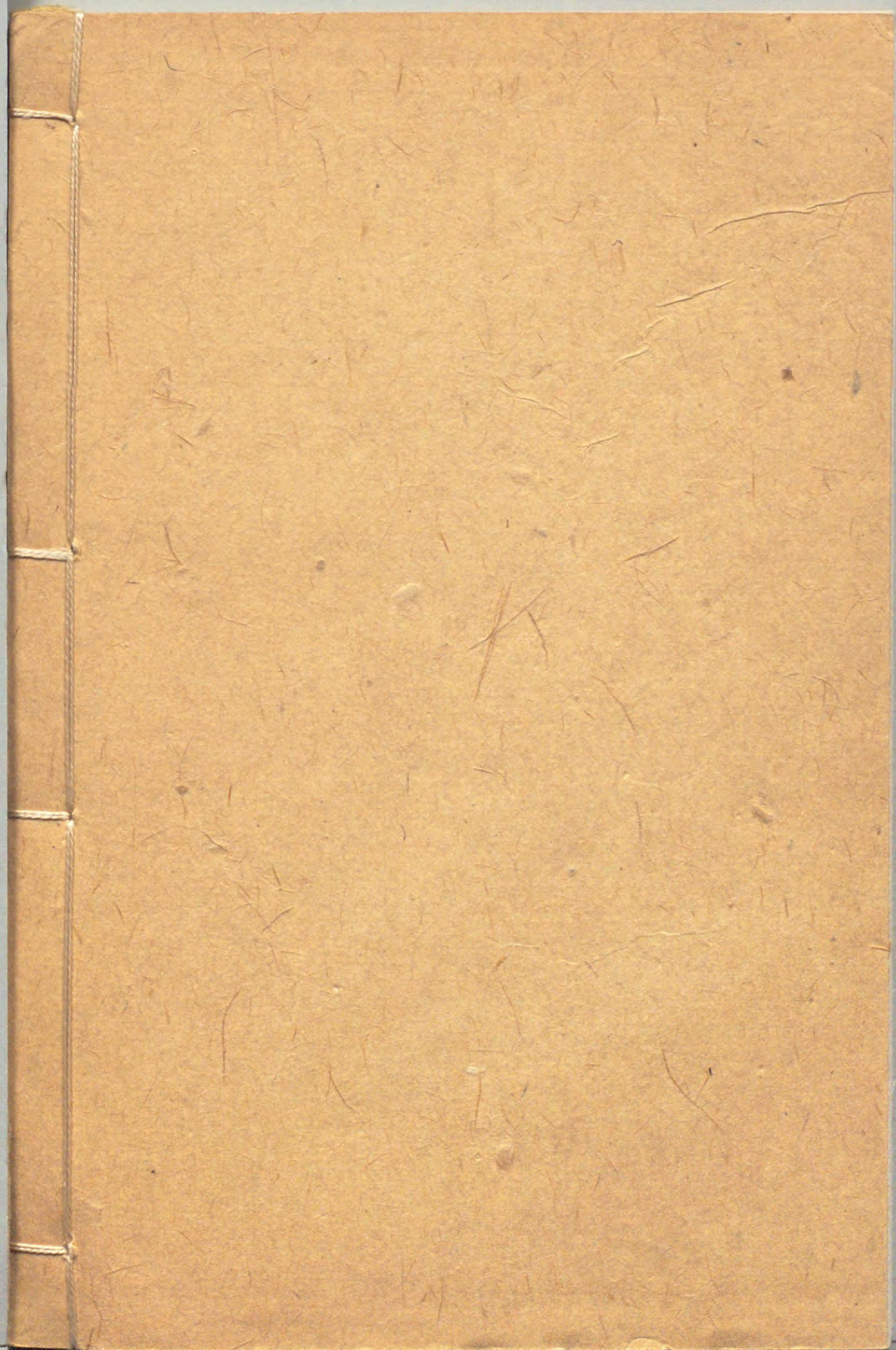
昭和四年三月十四日印刷  
昭和四年三月二十一日發行

編者兼  
發行者  
神奈川縣鎌倉町小町  
間島

印刷者  
東京市京橋區宗十郎町十五番地  
小林國泰

印刷所  
東京市京橋區宗十郎町十五番地  
會社  
東國文社





911.168-M4442m



\*1200600641208\*

集約済 2冊

岡島兄弟集

911.168

M4442m



911.168

M4442m

693581

693582



